

「IISIA スキルアップ・スクール」第 1 期(2008 年度前期)

各回授業ご報告(第 1 講～第 4 講)

第 1 講

去る 4 月 26 日(土)、弊研究所セミナー・ルームにて「IISIA スキルアップ・スクール」の初回授業が行われました。

科目は「情報リテラシー」。講師は IISIA 代表・原田武夫。

初回授業の様子をご報告いたします。

●自己紹介

13 時 30 分、授業開始。

まずは受講生の方々の自己紹介です。

職業、年齢、性別、投資経験の有無・長短…。

社会人対象のクラスだけあって、実に様々な経歴をもつ受講生たち。

思い思いに、「IISIA スキルアップ・スクール」にかける気持ちと、

現在のご関心事項を語っていただきました。

特筆すべきは、皆様の巧みな語り口。

それぞれ実に興味深い物語が語られていきます。

逆転また逆転の投資歴を、ドラマチックに語ってくださった方も

いらっしゃいました。

●授業——驚きの連続

受講生の濃厚な自己紹介は、何と 1 時間に及びました。

いよいよ実質的な授業の始まりです。

「自己紹介をお聞きして、皆様が「富」に強い関





心を

お持ちだということがよくわかりました(一同笑)。

では、「富」と「情報リテラシー」はどのように

関わってくるのでしょうか？」

受講生に問いかける IISIA 代表・原田武夫。

普段のセミナーとは異なる対話形式に驚く受講生たち。

それでも、おずおずと一つの意見が出されます。

—投資で「富」を得るには、先のことがわかっていればよい。

「では、どうすれば先のことがわかるのでしょうか？」

新たな問いに対し、初めは控えめだった受講生の方からも、

一つまたひとつと意見が挙がっていきます。

それらをホワイトボードに書きとめる IISIA 代表・原田武夫。

—直感

—現在までの流れから考える

—「知っている人」に聞く

—半年後のイベント・カレンダーから考える

—NY の先物相場から判断する…

しかし、多くのアイデアが出された後に出されたのは、

意外なコメント。

「たくさんの意見を出していただきましたが、

一つだけ出なかったものがあります。それは——

「歴史に学ぶ」です」。

驚きを隠せない受講生たち。

将来のマーケット動向を知るのに、なぜ歴史を知る必要があるのか。

そんな受講生の疑問に答えるべく、

IISIA 代表・原田武夫は戦前の日本、及びマーケットの情勢と

現在のそれとの並行性について話を展開して行きました…。

間に休憩を挟みながらも、問答、そして常識を揺さぶる結論というセットが話題ごとに繰り返され、息つく間もなく授業は終了。

授業後も、多くの方がセミナー・ルームに残り、IISIA 代表・原田武夫を質問攻めに。

意欲に溢れる受講生の方々のおかげで、初回授業は大盛況のうちに幕を閉じたのでした。

第 2 講

5 月 31 日(土)、「IISIA スキルアップ・スクール」第二回授業が開催されました。

科目は同じく「国際政治・地域情勢」。廣瀬陽子講師が昨日の「IISIA プレップ・スクール」に続き教鞭を執りました。

● 複雑な地域事情を、単純化せずに

IISIA 代表・原田武夫による導入に続き、廣瀬講師の登壇です。テーマは、「地域研究を捉える視点—コーカサスを事例に—」。

コーカサスという、日本人にとって馴染みの薄い地域をめぐり、いかなる大国間の駆け引きが展開されているのか？
そしてそれはなぜなのか？

多様な民族がひしめくこの地域を、宗教・言語・政治と

いった様々な側面から立体的に解説していく廣瀬講師。

さらにエネルギーや地政学といった観点から光を当てることで、

徐々にユーラシアの要衝としての明瞭なコーカサス像が

受講生の前に立ち現われてきます。





エネルギー供給に関わる各国の利害関係も、
資源分布やパイプラインの地図を用いた説明によって、
鮮やかな手つきで整理されていきます。

親欧米か、親ロシアか。

さらにトルコやイランといった近隣イスラム国も考慮事項に含め、
錯綜した地域情勢を、明確に、しかし決して単純化せずに
扱う廣瀬講師。

その手並みは、前日の「IISIA プレップ・スクール」で
行われた冷戦に関する議論同様の繊細さを示していました。

メディアなどではしばしば乱暴な二分法に流れがちな国際情勢を、
いかに種々のバイアスから逃れて、あるいは自覚的になって考えるべきなのか。
その一つの答えが、授業を通して受講生には示されたのではないのでしょうか。

質疑応答では、「この地域におけるパイプライン建設の人足はどこで
確保されているのか」といったディープな問いかけも受講生から飛び出し、
第二期「IISIA スキルアップ・スクール」も、会場に漂う知的な緊張感が冷めやらぬ中、
講義終了となったのでした。

次回授業科目は第三講、IISIA 調査部リサーチャーの
菊地正彰講師による「企業と金融」です。
ご報告を楽しみにお待ちしております。

第3講

6月21日(土)。

今回は社会人対象の「IISIA スキルアップ・スクール」授業日です。
菊地正彰研究員による第三講「企業と金融」、今回は「社会人編」です。

● 書かれ、読まれうる限りにおける歴史

まずは IISIA 代表・原田武夫によるイントロダクション。
今回もキーワードとなったのは「歴史」でした。

個人課題についてのコメントから語り起こす IISIA 代表・原田武夫。
前回の講評を受け、今回の個人課題には力のこもったものが見られました。
とりわけ、受講生の多くがウェブ上の公開情報を頻繁に参照。
「徹底的に調べるべし」というメッセージに従った答えは、
質量ともに前回は大幅に上回る水準のものとなりました。

IISIA 代表・原田武夫はその点をまずは評価。
しかし、一層の「スキルアップ」のために新たな考慮事項を加えるのも忘れません。

「今回の皆さんのレポートでは、インターネットを使った十分な調査の跡が見られました。
それ自体は極めて重要な作業です。
しかし、これに留まらず更に力を伸ばすために、ぜひ書籍もリサーチの
対照に加えてください」。

一方で様々な情報がオンラインに上がっていく現在。
しかし、他方でオンラインに上がらない情報もちろんあります。
そのため、従来からある書籍というメディアのチェックも不可欠である。

ここまでは一般論ですが、ここから先が IISIA 流。
では、その書籍、それも決定的な情報が収められた書籍が
絶版となり、あるいは版元の経営上の危機により入手困難になった場合はどうなのか？

ここで IISIA 代表・原田武夫が引き合いに出したのは、
北朝鮮に眠る大量の鉱物資源に関する一冊の
書物。

「歴史とは常に書かれたものです。
記録されなかった出来事は忘れられ、歴史として残ることはない。
そしてせっかく書かれたことであっても、アクセスが困難になってしまえば
やはり大部分の人にとっては『なかったこと』になってしまう。
[先ほどの本を取り出し]この本は、北朝鮮が歴史上、そして



現在もなぜここまで問題となっているのかを考える際に、
鉱物資源という観点から貴重な事実を指摘しています。

しかし、にもかかわらず、この本の版元は現在、
民事再生法の適用を受けることになってしまっている。
将来的にこの本がほぼ人目につかなくなってしまうと、
この本に書かれている事実さえ忘れられていってしまう可能性が
あるわけです」。

だからこそ、図書館等を利用し、読める限りにおいて
未だ残っている「歴史」を入念に押さえておく必要がある——
それが今回の講評における、IISIA 代表・原田武夫のメッセージでした。

●実践を想定したトレーニング

続いて菊地講師の授業が始まります。
前日の学生たちにとって企業とは「就職先」という側面の強いものでした。
「IISIA スキルアップ・スクール」受講生にとっては「投資先」という
ニュアンスが強く加わります。

しかし、ここでも重要になってくるのはあくまで
「会計的な考え方」。
「イメージ」を脱し、思わせぶりな数字に騙されず、
コスト認識をつねに心がけるのは、投資でも経営でも共通のスキルです。

まずは財務諸表について丁寧な説明を行う菊地講師。

- 財務諸表と決算書の違いとは何なのか？
- 財務諸表は企業の「成績表」なのか？

こうした疑問から説き起こし、実際に例を用いて解説
を加えていきます。

そこで引き合いに出されたのが、最近話題になった
米系大手投資銀行の決算。

公開されている情報であるにも拘わらず、その読み





方には入念な注意が必要であることを、実際の決算書を見ながら確認していきます。

その後も、発生主義会計と現金主義会計の比較、また会計基準変更によるインパクトを、前日同様に印象的な例を用いて説明していく菊地講師。

その一つひとつが、単なる知識の伝達を超え、実際に自分で考える場面を想定したものとなっていました。

授業終了後、IISIA 代表・原田武夫に加え、菊地講師も熱心な受講生の方の質問攻めに。授業内容はもちろん、それ以外のトピックについても引きもきらぬ受講生の方の質問に、「金融リテラシー教育」の重要性を痛感する一コマでした。

次回授業科目は第四講、翻訳・通訳のエキスパート、川上純子講師による「金融英語」です。ご報告を楽しみにお待ちしております。

第 4 講

7月26日(土)。
社会人を対象とする「IISIA スキルアップ・スクール」授業日です。
科目は前日同様「金融英語」。

学生に比べて、しっかり語学をやっている時間がない。にもかかわらず、投資で、ビジネスで、常に海外動向に注意を払う必要がある。そんな社会人受講生たちに、川上講師はどんなスキルを示すのか。「IISIA プレップ・スクール」同様、英文和訳の事前課題も出ており、受講生たちは緊張した面持ちで授業の開始を待っていました。

- 「この先」を考える姿勢

まずは IISIA CEO・原田武夫が教壇に立ち、
個人課題へのコメントを行います。

この課題は、「IISIA プレップ・スクール」でも扱われた
” The Growth Report “(2008 年 5 月に世界銀行が発表)の抜粋を読み、
「ワシントン・コンセンサス」および「構造改革」の過去と現在について
検討することを目的としたものでした。

「今回の皆さんの提出課題を見るに、
これまでの流れと、“ effective government “の必要を説く
このレポート(“ The Growth Report “)の趣旨を
よく理解なさった上で論を組み立てられたようですね。
その上で重要になってくるのが、これからどうなるのか、
この先にどんな『潮目』があるのかということです。」

そして、「この先」を考える際に外せないのが目下の米国大統領選挙。
方々で勝利が予想される米国民民主党ですが、重要なのは、
民主党政権の成立はマーケットにどのような変化をもたらすのかということ。

その一つとして IISIA CEO・原田武夫が挙げたのが、米国における
「貯蓄」観の変化。

米国といえば「消費は美德」というイメージがありますが、
その米国で貯蓄を奨励する動きが出てきて
いる。

“ The Growth Report “が政府の必要性を
強調していることと、
この貯蓄観の変化は、どのように対応し、今
後の流れを決定づけているのか…。

時を同じくして起こっている事象。
その背後の巨大な動きと、「この先」を常に考
えながら

公開情報に接すること。

情報に接する際の能動的な態度こそが予測分析の要諦である…。





これまでの授業を通じて、IISIA 流の「情報リテラシー」に
だいぶ慣れてきた受講生たち。

まさに「この先」を考える姿勢から、IISIA CEO・原田武夫に対し、
活発に質問を投げかけていました。

● 実践を想定したトレーニング

IISIA CEO・原田武夫によるイントロダクションが終わり、
川上純子講師による「金融英語」の授業が始まります。

前日の「IISIA プレップ・スクール」同様、金融英語を
読み解く際の背景知識をわかりやすく示していきます。

マーケットの動きを見る際に欠かせない有力英語メディアの特徴を
紹介した後、実際に記事を読む上での注意事項に触れる川上講師。

「英語の記事は、非常にはっきりした構成でできています。
冒頭部に内容を凝縮した文が置かれ、その後に
裏付けとなる事実の指摘や、予め想定される反論と
その吟味の部分が続きます。
そして結論部で、伝えるべきポイントについて
再度言及があるわけです。」

英語メディアの書き手たちが、高等教育課程
以来
徹底的に叩き込まれる文章構成のスタン
ダード。
それを意識し、ある文が全体の中で
どのような機能を担っているのかを
考えつつ読むことで、記事の論旨を違えるこ
となく
把握することができる…。



まずはこの基本を押さえるように薦める川上講師。



しかし、例外があることの指摘も忘れません。

「ある程度、記事の構成がわかってくると
内容理解のスピードも上がってきます。
けれども、注意しなければいけないのが、
それまでの記事の内容に反する文章が
記事の最後に唐突に現れる場合。
それほど数が多いわけではありませんが、
たまに記事の末尾で驚くべきヘッジをかけているものもあります。」

ざっと大まかな内容を捉えることも大切な技術ですが、
細かい部分に注意しなければならない場合もあることに
気をつけてください。」

ストレートな情報伝達という印象の強い時事報道。
しかし、そこには書き手が意図するか否かに拘わらず、
何らかのかたちで解釈や分析が入りこんできます。

そうした点に敏感になるべきだという川上講師の指摘には、
日々「金融英語」と接している翻訳のプロならではの
リアリティがあります。

また、こちらも前日同様行った実際の読解においても、
類似した意味を持つ単語の訳し分けなど、内容理解に影響を
与える重要なポイントを丁寧に説明していました。

一通り授業が終了した後の質疑応答では、
更なるスキル・アップのための勉強法や
授業で扱った英文記事に対する質問が殺到。

忙しい中でも、「金融英語」を読み解いていくことの
重要性和楽しさに、改めて気づいた様子が窺われました。

次回授業はついに最終講。
受講生たちがこれまでの授業でいかに成長したかを試す修了試験です。
ご報告を楽しみにお待ちしております。